隣の彼女

女１　ナオミ
女２　ユイ

作　池浦典子（横浜　劇団麦の会）

ベンチが二つ。
左側のベンチの左端に女１が、右側のベンチの右端に女２が座っている。
二人の横には空になった缶ビールがタワーのように積んである
だが、二人とも酔ってる様子はない

二人、ケータイで誰かと話をしている

ナオミ　来れないってどういうこと？！
ユイ　仕事なら仕方ないけど、
ナオミ　約束守る気あんの？
ユイ　でも、ここんとこずっと
ナオミ　できる男は時間の管理もできるのよ！
ユイ　疑ってるわけじゃないよ、ただ
ナオミ　もう、言い訳は聞きたくないの。
ユイ　あたしだって
ナオミ　は？来なくていいから。
ユイ　いつまでも待てない。

ナオミとユイ　同時にケータイを切る。
ナオミは電源まで切って、カバンの奥にしまう
ユイはケータイを少し見つめて、膝の上に置く。

二人、同時に何本目かの缶ビールを開ける。
プシュッという音に初めて、お互いの存在に気付いたように見合う。
気まずいのか、すぐに視線をそらして二人黙ってビールを飲む。

ナオミ　来るの？
ユイ　…え？

ナオミ、ユイが置いたケータイにちらっと視線を送る

ユイ　来ません。
ナオミ　そ。
ユイ　来なくていいって言ったら、来ませんよね。
ナオミ　そうね。
ユイ　来てほしいって意味なのに。
ナオミ　待てない、も来ないわね。
ユイ　はい。
ナオミ　待っててくれ、ぐらい言えないのかしらね。
ユイ　電源、いいんですか？
ナオミ　どうせかかってこないわよ。
ユイ　もしかして。
ナオミ　ないわよ。
ユイ　もしかしてって思ったら、切れないです。もしかしたら、今…
ナオミ　そんな気のきく男なら、そもそもあたしをイライラさせない。

ユイ　そう、ですね。
ナオミ　そうやってケータイ握りしめて待ってる、って思うから余計かけてこないのよ。
ユイ　あ。そういうものでしょうか？
ナオミ　あたしなら、いや。

突然、ユイのケータイから何かの着信を知らせる音が鳴る
あわてて確認するユイ

ユイ　なんだ…
ナオミ　違うの？
ユイ　ツイッターに返信が。
ナオミ　紛らわしい。
ユイ　はい。

ユイ、しばらくケータイをいじって、再び膝の上に置く

ユイ　どうせ、彼にはあたしが何してるかなんてわかんないんだから、ケータイ握りしめて待っててもいいですよね？
ナオミ　いいけど。寂しくない？
ユイ　寂しいです。
ナオミ　切っちゃえば、電源。
ユイ　それは怖いです。
ナオミ　そ。

ユイ　怖くないですか？
ナオミ　待つの、いやだから。
ユイ　？
ナオミ　かかってくるの待ってるから切れないのよ。自分からかけるなら、かけたい時に電源が入ってればいいでしょ。
ユイ　かけれますか？
ナオミ　かけれないわよ。
ユイ　ですよね。

再び、缶ビールを開ける。
ナオミは少しためらった後、勢いつけて缶をあおり、カバンの奥からケータイを出して
電源を入れると、カバンの一番上に無造作に置く。

ナオミ　かかってこないわよ。
ユイ　はい。

二人、またしばらく無言でビールを飲む
突然、ナオミのケータイのバイブが。あわてて確認するナオミ

ナオミ　…（無言でカバンに戻す）
ユイ　あの…
ナオミ　フェイスブック。
ユイ　紛らわしい。

ナオミ　ほんと。

二人、また黙ってビールを飲む

ユイ　少しは悪いなー、とか思ってるのかな
ナオミ　どーだか。
ユイ　思ってるけど、行動できない。
ナオミ　だから謝れない？
ユイ　だから電話かかってこない。
ナオミ　それ、意地張ってるだけじゃない。
ユイ　ケータイ見つめて、どうしようか迷ってるかも。
ナオミ　上司と接待中って言ってたから、それはないわ。
ユイ　仕事で同僚と一緒だって言ってたから、それはないか。
ナオミ　電源入ってたら期待しちゃうから、それがいやなのよ。
ユイ　そうですね。
ナオミ　少し音信不通にしてやった方が反省するんじゃない？
ユイ　その間、ずっと不安なのもいやですけど。
ナオミ　今、かけてるかも。
ユイ　メールくれたかも。
ナオミ　で、電話もメールもなくてへこむ。
ユイ　…そうですね。

二人、缶ビールを空けてタワーの上に積む

どちらともなしにケータイを手に取り、電源を切ろうとする

突然、ユイの着信音とナオミのケータイのバイブが鳴る

二人、画面を見つめたまま、しばらく動かない着信音とバイブが鳴り続けている

意を決したように、二人はケータイを耳にあてる

ナオミ　何？

ユイ　はい。

ナオミ　終わった？で？

ユイ　そう。お疲れ様

ナオミ　え？

ユイ　今から？

二人、なんとなく視線を合わせて

ナオミ　もう遅いし、今日は

ユイ　ううん、大丈夫。もう

ナオミ・ユイ　飲んでるから

二人、電話を切る。

ナオミもユイもカバンの中にケータイをしまう。それから、また新しい缶ビールを開けて。

美味しそうに、楽しそうに飲み始める。

おわり